

---

SEISHIN  
PREVIEW

---

---

誠信プレビュー 82

---

---

誠信書房

---

SEISHIN PREVIEW <誠信プレビュー>

第82号

発行日 2003年4月20日

発行所 株式会社 誠信書房

電話 03-3946-5666

振替 00140-0-10295

〒112-0012 東京都文京区大塚3-20-6

<http://www.seishinshobo.co.jp/>

能の神経活動を介した遺伝子発現の攪乱も一因である可能性がある。すなわち、たとえ適切な時期に適切な刺激（しつけ、教育など）があったとしても、その神経活動に依存した遺伝子の発現が環境化学物質によって攪乱され、結果的に発達障害、行動異常が起こる可能性である。

一方、問題の大きさに比し、このような憂慮に回答を与えるリスク評価のための科学的データ、情報は著しく不足している。どのような化学物質が、どのくらいの量で、どの時期に、どのような脳や行動の異常を起こすのか、ほとんど研究が進んでいない。私達は3年前からCRESTで研究チームを作り、脳の機能発達への甲状腺ホルモン系の重要性と、いまだに日本国内に多く残存するPCBが、甲状腺ホルモン系を攪乱し脳の発達障害を起こすことを示す実験結果を得ている。また知能低下、ADHDさらには自閉症や子育て行動などヒトの高次行動は、今まで行動毒性学の対象にはなっておらず、サルなどを使った新しい行動実験系の開発が必須である。そこで、ダイオキシンなど環境化学物質に曝露した母ザルから生まれた子ザルを用い、新しい「指迷路学習テスト」、子ザル同士の出合わせ実験、「アイ・コンタクト」実験などを組み合わせ、総合的な評価を目指している。またリスク評価のためには、これまでの観察法では観察者の負担が大きく観察に個人差が生じる問題があった。私達はラットのオープン・フィールドでの行動をビデオカメラで記録し、その画像からコンピュータで自動的に行動パターン分析、定量化するKineclusterシステムを開発し、環境ホルモン研究に役立てようとしている。

(くろだよういちろう | 東京都神経科学総合研究所 / CREST)

## ハンドテストの創始者 ワグナー博士を訪ねて

佐々木裕子

エドウィン・エリック・ワグナー (Edwin Eric Wagner) 博士。日本では、多重人格障害のロールシヤッフ特徴を指摘したワグナー指標という名称で彼の名を知る人が多いのではなかろうか。多重人格障害に関する研究は、確かに彼の多岐に渡る業績の一つであるが、私がワグナー博士を訪問した最大の目的は、彼が考案した新しい投映法検査であるハンドテストについて、彼から直接“手ほどき”を受けてくるためであった。

ハンドテストは、今はまだそれほど知られている心理検査法ではないが、近い将来様々な臨床現場で活躍するだろうと私は期待している非常に魅力的な心理検査法である。博士がまだ30歳前、1958-59年頃にこの検査の刺激である9枚の手の絵を彼自身が描いたそうである。当時アメリカでは、心理検査法（投映法）が実際の行動傾向を測定しているかについての議論が盛んで、博士はこれに答える意味で、「原型的な行動傾向」の測定に焦点を当てた投映法検査を考案することを思い立ったようである。博士によると、既に手や顔

の情報から情緒的な状態を判定することが可能であることを示したいくつかの研究がなされており、これらの研究が手の絵を刺激にしようと思いついたきっかけになったそうである。

ハンドテストの刺激図を作成するにあたり、博士はロールシャッハ法を念頭に刺激図は10枚で十分であること、また、TATを念頭に最後の1枚は白紙カードにすることを決めていたようである。必要なのは9枚の“曖昧な”手の絵である。彼はほぼ30分ほどで9枚の手の絵を描きあげたという。自分の手を見、それをイメージしながら、「忠実に再現しないよう」に注意しながら描いたらしい。ただ、なぜか博士自身気にもしていなかったことのようにであるが、右手と左手の絵ができてしまった。カードVIとVIIの2枚だけ左手なのである。しかも、IIカードは野球による怪我で曲がってしまった彼の左手を描いたものであるにもかかわらず（実際、今も彼の左手薬指は、まさに絵の通りの形に曲がっていた！）、ハンドテストのIIカードは右手である。この理由を聞いたが、博士自身“わからない”とのことであった。どうも、彼もまた奥様のキャロルも私が質問するまで、IIカードが右手であるとは意識していなかったようである。博士が手の絵を描いているとき、お二人は既に結婚されていて、奥様がいくつか手のポーズをとられたそうであるが、それがどのカードかなど、お二人とも詳しいことは覚えていないようであった。それにしても、奥様も臨床心理士でお二人は数多くの共同研究をされているのであるが、ハンドテストの誕生の瞬間からその共同研究は始まっていたことになる。

博士によると、この9枚の手の絵は、博士が最初に

描いた後、何の修正も加筆もされなかったそうである。唯一IXカードだけ、ハンドテスト開発の共同研究者であり、ロールシャッハ法で有名なピオトロフスキーの助言で“よりsexual”になるように上下が反対にされたとのことである。この絵をIXカードにした明確な理由は聞いていないが、ロールシャッハ法のピオトロフスキー法では、IXカードのショックは、異性愛行為に対する葛藤を示すとしていることを踏まえてのことであろう。また、カードIIIはIIカードによるショックから立ち直るための“recovery card”として配置され、カードVIはアグレッションが喚起されることを当然予測したものであった。しかし、ハンドテストの見事なカード継列（詳細は、吉川ら〈2002〉『臨床ハンドテストの実際』6章 誠信書房参照）すべてを予測していたわけではなく、カードの順番は博士の直観によるところが大きいようである。どのようにして順番を決めたのか、また、どのカードを最初に描いたかについても質問したが、やはり覚えていないとのことであった。

こうした素朴な疑問を博士から直接聞くことができたのは、2002年9月27日から30日の4日間、私はサウスキャロライナ州のIsle of Palmというリゾート地にある博士の邸宅を訪問し、朝から晩まで博士とお話しをすることができるという、非常に貴重な時間をいただけたからである。筋肉質で体格の良い博士は、外見通りの若々しいエネルギーで私の興味と関心に応えて下さった。博士は3階の書斎の物置いっぱいにあるケース資料の箱——おそらく千ケースは優に越えるであろうと思われる——の中から幾つかのケースを選び出し、拙い私の英語に気長につきあいながらケース検

討会を実施してくれた。とりわけ、現在彼が関心を寄せている脳損傷患者のケースについては、ハンドテストの脳器質サイン (organic sign) について博士の最新の知見を教わることができた。博士は私の何気ない質問一つひとつに対して、丁寧にそして多くの資料と率直な意見とで応えてくれ、私は博士のその懐の広さにすっかり甘えて、思いついたときに思いついた質問をするという贅沢な4日間を過ごした。その中で博士が繰り返し私に論じたのは、ハンドテスト使用のstrictな面であった。

その簡便さ、手という親しみやすさから、ハンドテストはどちらかというと容易な検査である。そのため、現在既に日本においても利用されている犯罪・非行臨床や病院臨床、スクール・カウンセリングにおけるアセスメント用具に留まらず、これからは発達障害者施設や老人福祉施設における適応評価、また、脳損傷患者における心理的問題の評価、身体機能障害者やペイン・クリニックにおけるカウンセリング臨床での心理理解など、幅広い可能性をもった検査である。しかし、この検査の使用に当たっては、博士が何度も繰り返されたようにstrictさ——厳しき——が不可欠である。正しい実施とスコアリング、そして解釈、これらによって初めてハンドテストは意味をもつのである。“やさしきと厳しき”を併せもつハンドテストは、まさにワグナー博士そのものである。これから私は、ハンドテストの手の絵を見るたびに、博士のがっかりした大きな手を思い出さずにはいられないであろう。

(ささきひろこ | 静岡大学人文学部)



誠信書房出版案内 —— 新刊・既刊・近刊

《読者の皆様へ》

◆小社の出版物は全国の主要書店の店頭にてお求めいただけます。店頭がない場合には注文にてお取り寄せください。

◆直接送付をご希望の場合は、お名前、ご住所(お届け先)、お電話番号、ご注文の書名、冊数をご明示の上、電話、FAX、e-mail (sei@seishinshobo.co.jp) にてお申し込みください。代金引換郵便にてお送りいたします。送料は1回につき一律380円(税込)です。お受け取りの際に代金(価格合計+消費税+送料)を郵便局係員にお支払いください。

◆公費でのご購入などで代金引換郵便が不都合な場合には、ご一報ください。

◆小社の新刊書および既刊書は、インターネットのホームページ (<http://www.seishinshobo.co.jp/>) でもご案内をしておりますので、ご参照ください。

◆本紙をご希望の方は、直接小社宛にご請求ください。定期的にお送り(無料)いたします。

〒112-0012 東京都文京区大塚3-20-6 電話03-3946-5666  
FAX.03-3945-8880 (<http://www.seishinshobo.co.jp/>)